

ロンドン旅行記 [その 1]

2010年11月15日(月)～19日(金)、バーレンがイスラム教の休日のため、これを利用してロンドンへでかけた。ロンドンには1976年末に赴任準備で長期滞在、1977年1月から1984年2月はじめまで家族同伴で駐在した。その後、日本から20回くらい出張したか、詳しくは憶えていない。最近10年では駐在先のオランダから2001年出張、2002年家内と観光、駐在先のバーレンから2004年2月に出張したことを憶えている。

バーレン駐在も、もう長くはないし、年齢も70歳を超えたので、思い出の地を訪ねるセンチメンタル・ジャーニーでもしようかと思ったわけである。「失われた時を求めて」の旅と言ってもよい。

【ヒースロー空港】 ロンドン駐在時、Terminalは1から3まで。その後4ができた。今回、Terminal 5までできていることを知ったが、使用目的は調べなかった、僕の飛行機はGulf AirでTerminal 4に到着。地下鉄の駅が至近で便利。これでPiccadillyまで50分。駅員が「5日間なら20ポンドのOyster cardで、Heathrow-都心往復と都心乗り放題にまず足りるだろう。3ポンドのDepositを加算。これは帰りにrefundする」と教えてくれた。成田Express相当のHeathrow Expressは片道で20ポンドするし、Terminal 4から乗るのに多少時間がかかりPaddington駅までしかいかない。所要時間は20分だが経済性は地下鉄が断然まさる。HotelはRegent StreetのOxford Circus近く、昔働いていたOfficeのビルから2ブロック先にとった。Piccadilly LineからPiccadillyでBakerloo Lineに乗り換えに、思いスーツケースをもって階段を上がる。日ごろジムできたえているから、たいしたことではなかった。

【地下鉄】 地下鉄で昔とちがうこと。

外部・内部構造は基本的に変わっていないが、きれいになった。駐在当時1970年後半には、最後尾の車掌さんが「Mind the door!」などと怒鳴っていたが、今は駅の構内放送と社内放送だ。「日本は放送がしつこくてうるさい。騒音公害だ。欧州は静かだ。」という評論家が日本にはよくいたものだ。確かにそうだが、昔より少しうるさくなったロンドンの地下鉄は、しかし、降り間違いが防げるなど、便利になったともいえる。また社内には次の駅の電光表示も、社内放送もあり。地名の正しい読み方の助けにもなる。



くいたものだ。確かにそうだが、昔より少しうるさくなったロンドンの地下鉄は、しかし、降り間違いが防げるなど、便利になったともいえる。また社内には次の駅の電光表示も、社内放送もあり。地名の正しい読み方の助けにもなる。

[英国の地名の読み方は仏語・独語のような規則性がないので憶えるしかない。この話をはじめると長くなるので、ここでは割愛。]

【新聞】 地下鉄がロンドン西部を走っている間、車窓から外の風景をながめ「変わらないな。」と感慨に耽っていたが、社内に目を移すと変わらないものと変わったものに気づいた。

新聞を読んでいる人が依然多く、35%くらい。携帯をのぞきこんでいる人は日本ほど多くなく5%。本を読んでいる人5%。なにも読んでいない人が55%。変わったことは、社内で読みやすいタブロイド版サイばかり。「あれ The Times までタブロイド版か。」高級紙 Times もタブロイド版になりカラー写真が多いと内容まで大衆化したような印象を受ける。

ホテルではホテル代に含まれた The Times が毎朝5時半に部屋に配達されたので読んでみたら、Daily Express ほど大衆化はされていなかったが、昔より読みやすく面白く感じた。82 頁もあるのでとても全部は読んでいられない。駐在当時は The Guardian を自宅配達でとっていた。高級紙のなかでは頁数が少なく英語がもっとも易しいから。しかし日曜版がないので、日曜紙の Observer か Sunday Times を日曜の朝、新聞代理店へ買いにいったものだ。

Observer は Guardian とともに論調は労働党系。保守党系の Daily Telegraph は英語が難しく敬遠していた。Times はその中間という感じだった。

英国の新聞の3階層：

Broadsheet(タブロイド版が増えた今でもそう呼ぶのだろうか?) Guardian 50 万部、Times 69 万部。Daily Telegraph, Independent (リベラル。僕の駐在中にはなかった。), Financial Time (世界中の発行部数を足せば相当でしょうね。)

Middle Market Daily Express, Daily Mail, Evening Standard (日本のタブロイド版の「現代」「フジ」といったところ。駐在中よく地下鉄へもぐる入り口で帰宅時に買ったものだ。)、Metro(後述)

Tabloid Daily Mirror 200 万部。Sun400 万部-本当かな?(右派。ゴシップ紙。マードックが Sun と Times の両方の Owner というのが面白い) Daily Sports

さて地下鉄風景に話をもどす。Times を読んでいる大学教授風の乗客もいたが、多くの人を読んでいるのは Metro。僕の駐在時にも、過去の出張時にも見たことになったもの。15 日は「Metro はすごいなあ」と思っていたが、17 日に地下鉄内で、読み捨てている人、それを拾って読んでいる人が多いことに気が

ついた。まねをして読んでみた。なんだ Metro (紙名) の横に小さな字で Free と。書いてある。地下鉄だけで手に入る無料の新聞なのだ。だから読んでいる人が多いのだ。



「新聞愛読者おとろえず。さすが英国。」と当初感心した自分が馬鹿に思えた。「無料」が支えているのだ。後で知ったことだが、7-8人の editor で広告収入により無料を可能にするという Business Model を Metro は実現したのだという。おかげで Evening Standard の売れ行きがガタ落ちしたそう。Metro の内容は、流し読みした感想だが、Evening Standard ほど面白くはなかった。有料なら買う気にはならないだろう。

[栄枯盛衰] Oxford Circus 近くに Hanover Square がある。ここには東京銀行、日本航空、いぎりす屋(日本人相手のお土産屋)があったが、すべてなくなっていた。かつての日本勢で健在だったのはレストラン「さくら」だけだった。日本人観光客に人気だったスコットランド衣料品店「スコッチハウス」は Regent Street の支店も、Knightsbridge 本店も姿を消していた。Burberry に買われたという。Regent Street にあった Dickins & Jones という衣類中心のデパートが姿を消したのはかなり前だ。今回ショッキングだったのは、有名なデパート Liberty が Regent Street 沿いからなくなっていたこと。裏の Tudor House 調の建物では仕事を続けていた。[写真] Regent Street 側は貸しているのか売却したのか。



Piccadillyにあった衣類専門デパート Simpson は長い間経営不振の噂があった。今回、そこが Waterstone という大きな本屋になっていて、「ここに Simpson ありき」という名板がはめこんであった。[下の写真]
Waterstone は急成長したのか今回あちこちで店を見た。

なお「Simpson's」という似た名前の、有名な roast beef のレストランがあった。高価でまずいので、いずれつぶれると思っていたが、[次頁写真]のように健在。





Roast Beef Simpson's の近くにある名門 Savoy Hotel は 3 年間の改修を経て今年 10 月に再開した。数ヶ月前にバーレンで読んだ英紙 **Financial Times** によると、改修前の閉鎖時 300 人以上いた従業員は全員解雇。改修後もどってきた元従業員は 60 人だったという。改修工事で最も大変だったのは古くなりすぎた配線・配管の更新だったそうだ。Savoy の中には、英国駐在中には **Afternoon** 接待で入ったことはあるが、今回はそれなりの服装をしていなかった中に入らず、外から写真をとった。[下の写真]



[その 1 終わり]